



幕末・明治期の日本で活躍したフランス人 (2) (フランソワ・レオンス・ヴェルニー)

神戸大学 経済経営研究所
教授 青山 利勝

レオン・ロッシュ第2代フランス公使が幕末の江戸幕府に近づき、彼の仲介で幕府がフランス中部の地方都市であるリヨンやその近郊のサンテティエンヌから製鉄技術者を招き、彼らが横須賀に海軍造船所を建設したことは前のコラムで紹介した。幕末の日本は開国を巡って騒然としていた。1853年にアメリカのペリー提督が率いる黒船が浦賀沖に来港して以降、江戸幕府はアメリカ、イギリス、フランスと修好通商条約の締結と開国を迫られ、それまでの鎖国政策を放棄せざるをえない状況に追い込まれていた。1858年には江戸幕府の大老井伊直弼がアメリカ、イギリス、フランスとの間で後に不平等条約として問題となる修好通商条約を締結している。江戸幕府を畏怖させ開国を決断させた主な理由としては、欧米列強の率いてきた戦闘可能な巨大な鋼鉄船であった。折しも1864年には長州藩が下関海峡を通過していた外国船を砲撃したことから、馬関戦争が勃発した。イギリス、フランス、アメリカ、オランダの連合艦隊が下関に来襲し、海岸の砲台が占拠され市街地が焼かれ、長州藩は連合艦隊の前に脆くも降伏してしまった。この事件は欧米列強の軍事力の強大さを日本中に知らしめることとなった。そこで江戸幕府は欧米列強への対抗措置として海軍力の増強の必要性を認識するようになるのである。

ここでは横須賀の海軍造船所の建設に従事したフランス人製鉄技術者一行の代表であったフランソワ・レオンス・ヴェルニーに光をあててみたい。

フランスはアジアの植民地獲得競争で対抗するイギリスよりも日本への進出が遅れていた。この劣勢を挽回するため、イギリス外交の盲点を突く必要があった。イギリスは1862年に起きた生麦事件の結果、薩摩藩と賠償問題を協議する内に次第に薩摩藩の内情に精通するようになり薩摩・長州藩などの討幕派との関係を深めるようになっていく。このため、レオン・ロッシュ（第2代フランス公使）は江戸幕府への接近を試みることになる。幕府内には開明的な外国奉行の栗本鋤雲（瀬兵衛）や勘定奉行の小栗上野介（忠順）がいた。レオン・ロッシュは彼らに日本を近代国家とするためには、江戸幕府の海軍力の増強が不可欠であることを説くことになる。そして、フランスの日本進出の足がかりとして、江戸幕府にフランスから海軍技師や製鉄技術者を招いて、海軍造船所を建設させることを決意させる。

レオン・ロッシュは、中国の寧波（ニンポー）で造船所の建設に従事していたフランソワ・レオンス・ヴェルニーを日本に呼び寄せ海軍造船所の建設を依頼することになる。公式にヴェルニーを優秀な海軍技師としてロッシュに推薦したのは、パンジャマン・ジョレ

ス・フランス海軍インドシナ艦隊司令官であった。しかし、ロッシュがグルノーブルの出身、ヴェルニーがアルデッシュの出身であり、どちらもリヨン周辺のローヌ・アルプ地方出身であったことから、ロッシュがヴェルニーを日本に招聘するにあたって以前から何らかの人的なつながりがあったかもしれない。少なくともロッシュは同郷の輩としてヴェルニーに親しみを感じていたことは確かであろう。

フランソワ・レオンス・ヴェルニーは1853年から3年間フランス中部の地方都市であるリヨンの高等学校（リセ）で勉学した後、パリの理工科大学校（エコール・ポリテクニク）で造船技術を学んでいる。更に、1858年に海軍造船大学校に進み、最新の造船工学を修得する。こうしてヴェルニーは1861年にブレスト軍港での勤務を命じられ、海軍造船技師としての第1歩を踏み出すことになる。翌年には中国の寧波（ニンポー）での造船所建設を命じられ、1863年に上海に上陸する。寧波での劣悪な環境の中での勤務はヴェルニーの評価を高める上で大いに役に立ったようである。また、彼は中国人職員の育成にも尽力し、ここでの経験が後の横須賀での勤務に役立つことになる。

ヴェルニーがロッシュに迎えられ、横浜に上陸したのは1864年11月のことであった。ヴェルニーは早速江戸周辺の地図を手に入れて、海軍造船所の建設に適した場所の調査を行った。その結果、湾が深くて広く外海から保護されている横須賀がフランスのトゥーロン港に酷似していることから、ここを建設地とした。一寒村にすぎなかった横須賀には最盛期には45家族のフランス人が居住し、さながらフランス村を形成していた。ここには造船技術や製鉄技術の専門家、職工、医師などが住んでいた。

ヴェルニーの功績は、単に海軍造船所を横須賀に建設し、大型艦船の建造や修船を行っただけではなく、日本人技師の育成に力を注いだことにある。ヴェルニーが創設した高等技術教育学校は、技術者養成科と職工養成科からなり、パリのエコール・ポリテクニクの教育の実践を模範としていた。この学校が日本の近代化の過程で、理工科系の教育の発展に果たした役割は非常に大きかった。そのみならず、フランス文化を吸収する教育の場としての役割も果たしていた。西堀昭著「日仏文化交流史の研究—日本の近代化とフランス」によると、この学校でフランス語を学んだ川島忠之助がジュール・ヴェルヌの「新説八十日間世界一周」を和訳し、これが日本で初めてのフランス文学の翻訳書となったことが知られている。

結局、ヴェルニーは十年間以上日本に滞留した後、1876年にフランスに帰国する。フランスでは故郷のアルデッシュ近くのサンテティエンヌにあったフィルミニエー石炭鉱業会社の監督となって、人生最後の仕事を遂行する。1895年に故郷のアルデッシュ・オブナに戻ったヴェルニーはそこで晩年を家族と共に過ごしている。

現在、横須賀臨海公園には、ヴェルニーと幕府勘定奉行であった小栗上野介（忠順）の胸像が設置されている。二人が幕末の日本の近代化に貢献したことを讃えるため、毎年11月に横須賀市の主催で「ヴェルニー・小栗祭」が開催されている。（了）